

池間島の聖地ウハルズの立地を地形から見る — 石の信仰の観点から —

我那覇 念

要旨

池間島のウハルズの神は、ウイバルヤマに降臨した来訪神である。聖域であるウイバルヤマの東境はバリナーダキと呼ばれる琉球石灰岩堤で、その北東方向に面する崖面は平滑な面をしている。神の降臨に係る御嶽や陵墓(王族関係)の事例は沖縄本島でも複数あり、それらにも平滑な岩壁・崖面が見られる。このことからウハルズの神はバリナーダキを依り代(磐座)として降臨したと推測される。

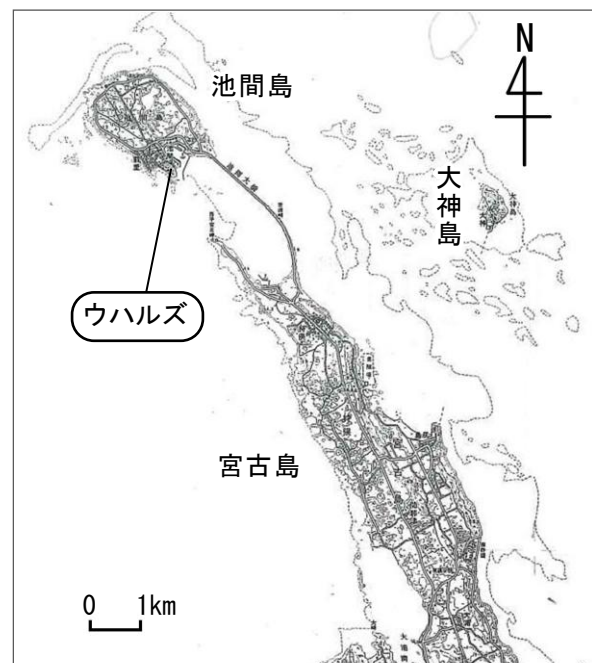
またバリナーダキの東方向には沖縄本島と宮古島・漲水港(平良港)を結ぶ航路が古くからある。沖縄本島にも航路と関係のある御嶽が北からの島伝いの航路沿いの海岸近くに見られる。両地域の聖地に景観・神意(航海安全)の共通性が見られること、12世紀頃の九州系の遺物が漲水港近くの住屋遺跡から出土していることから、ウハルズは12世紀以降に宮古に来航するようになった九州からの航海者の立場で航海安全の神を祀るために創建されたと推測される。

キーワード：ウハルズ、ウイバルヤマ、バリナーダキ、来訪神、御嶽、陵墓、平滑な岩壁・崖面、航路、磐座。

1 はじめに

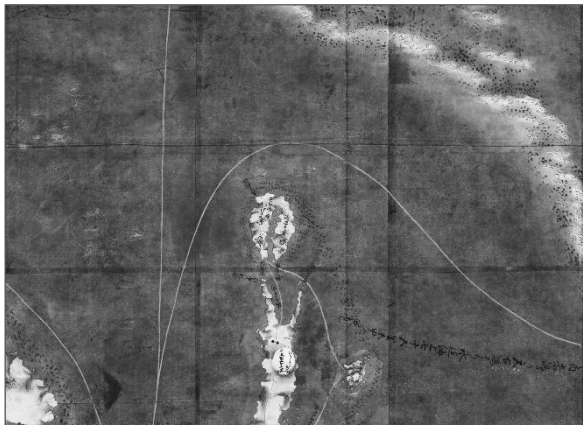
池間島は、北緯24度55分・東経125度14分に位置し宮古諸島北端にあり、面積が2.83km²、最高海拔高度が28.1mの低平な島である(第1図)。島の地質は、琉球石灰岩が広く分布し、東半部の一部に固結度の低い砂岩が分布する。両方とも保水力は高くないので土地生産力は高くない。

池間島の周辺海域には八重干瀬をはじめ多くのサンゴ礁が広く分布している。船舶の航行上危険な海域であるが、1648年に薩摩藩が作製した「琉球国絵図」(以下「国絵図」と略す)には池間島の北東～北～西の海上を通過して宮古島北西海岸へ向かう航路が描かれていて現在も利用されている(第2図)。



第1図 池間島及びウハルズの位置

(国土地理院発行：5万分の1地形図「宮古島北部」を一部改変・縮小。1目盛1km)



第2図 池間島近海の航路

(東京大学史料編纂所所蔵：『正保琉球国八山島絵図』より)

聖地ウハルズは、池間島の南端の小岬先端近くにあり神名や神の性格などについて琉球王府が1713年に編纂した「琉球国由来記」(以下「由来記」と略す)に見られる^{※1}。それによると、ウハルズの神は嵩原の山に顕現した航海安全などの男神であることが記されている。

山に顕現していることからウハルズの神は来訪神であること、ウハルズ一帯の山〔地元ではウイバルヤマと言う。以下ウイバルヤマとする〕が依り代としての条件を備えていたことがわかる。しかしその条件の内容に関する史料はなく、伝承も池間島にはない。島内には来訪神が祀られている拝所は他にもあるが、いずれもウハルズと同様にその地の選定理由は不明である。

日本では、古くから来訪神は高木や特徴的な地形などを依り代に訪れて来るとい^{※2}。依り代という考え方の背景にはアニミズムがある。来訪神であるウハルズの神は、ウイバルヤマのどのような自然物を降臨する際に依り代としたかは記録や伝承もなくわからない。またその依り代について検討した研究事例も見当たらない。

ウハルズの神が依り代としたウイバルヤマの自然的特徴を明らかにすることは、聖地ウハルズ創設に関わった人々の自然観の一端の推測に

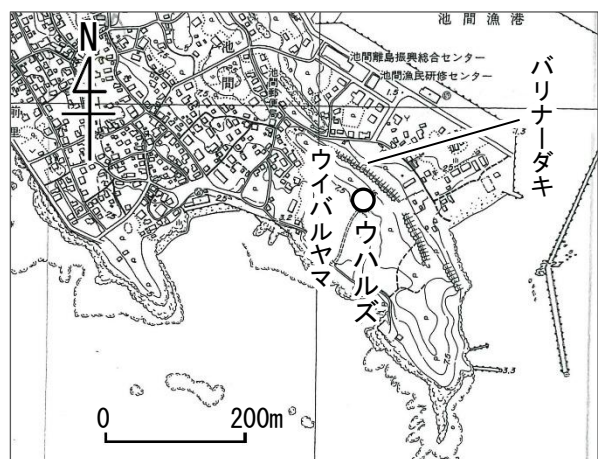
もつながる可能性があると考えられる。さらに県内各地にある御嶽の立地について考察することにも資すると考えられる。

そこで本稿では、ウハルズが聖地として選定された理由、すなわち来訪神であるウハルズの神が依り代にしたのはウイバルヤマの自然的特徴の中の如何なるものであったのかを推測することを試みる。

研究方法としては、ウハルズの神が航海安全の神であることから、ウイバルヤマだけでなく池間島周辺海域も含めた地域の地理的環境を関係する文献資料・地図類なども活用して把握するとともに、県内の他の地域における神の降臨に係る御嶽などの地理的特徴も参考にして検討する。

2 ウハルズとは

ウハルズとは、池間島にある拝所で、オハルズ、ナナムイともいう。島の南端にある南方向に突き出た小岬の先端近くにあり、祭祀場所は海拔高度8m前後の平坦地に設けられている。海岸から100mほど内陸(東方)に入ったところにウハルズはある(第3図)。生い茂った樹林地の内部にあり、その位置は入り口にある鳥居によって西の海上からは知ることが出来る。



第3図 ウイバルヤマ・ウハルズ及びその周辺の地形
(国土地理院発行：5千分の1国土基本図を一部
改変・縮小。1目盛200m)

「由来記」には次のように記されている。

「池間御嶽

男神。オラセリコタメナフノ眞主ト唱。(池間村後峰ノ上ニ有)船路且諸願ニ付、池間村中、崇敬仕ル。

由来。往昔、右神、池間村後、嵩原ト云フ山ニ顯レ、世ノ爲、神トナラセタマヒタルヨシ、云傳有テ、崇敬仕ル也。」(下線は引用者) (『琉球国由来記』巻二十 p. 579。以下『由来記』と略す)

この記述に見られるように、男神が嵩原山に顕現し、航海安全の神として島人に崇敬されたと言う。この神は航海安全だけでなく豊作・豊漁などの神でもあることが、ウハルズでの祈願内容からわかる。^{※4}

嵩原山とは地元でウイバルヤマと呼ばれていて、ウイバルとはその一帯の小地名であり、ヤマとは木の生い茂った場所を意味する地元の言葉である。木が生い茂った場所であるヤマの上(頂)に神が降臨したことになる。

降臨した神は、他の場所へ移動することなくウイバルヤマにそのまま鎮座していると島の人々は信じている。^{※5}この神への祭祀を行うためにウイバルヤマの内部に設けられたのがウハルズであると考えられる。それ故ウハルズの聖域の範囲はウイバルヤマの区域に一致することになる。

このことは、ウハルズの聖地選定の理由を考えることとウイバルヤマが神の降臨地になった理由を考えることは同義であることを示していると言える。祭祀空間であるウハルズには特徴的な自然物は見当たらない。聖地選定の理由を推測するには「由来記」に神の降臨に関する記述があることなどからウイバルヤマを通して考察することが適切と考える。

3 ウイバルヤマ及び周辺の地理的環境

来訪神の降臨する場所は、その地域の人々の

神観念とそれに影響を与えていると考えられる地理的環境に応じて選定されたと思われる。

このような考え方で見ると、ウハルズ創設頃の池間島の人々の神観念では、ウイバルヤマが神の降臨の場所としての地理的環境を有していたことになる。当時の人々がどのような神観念をもっていたのかも重要な検討事項であるが、本稿では地理的環境を通して見たウイバルヤマへの神の降臨の理由を検討する。

地理的環境は自然環境と人文環境からなる。人文環境の基礎をなすのが自然環境であることから、まずウイバルヤマの自然環境について見ていく。

〔自然環境〕

ウイバルヤマは琉球石灰岩堤と野面積みの低い石垣で境されている。この琉球石灰岩堤は東落ちの断層地形でウイバルヤマの東側境界をなしておりバリナーダキと呼称されている。^{※6}このバリナーダキの高さを超える樹木の生育はウイバルヤマには見当たらない(写真. 1)。



写真. 1 バリナーダキ
(東方向から)

このことは、「由来記」に見られる“嵩原ノ山”とはバリナーダキのことであり、その頂上にウハルズの神は降臨したことを意味していると言える。バリナーダキ西側の樹林地の内部に拝所ウハルズがある。

バリナーダキは、北東側にやや張り出して南東一北西方向に200mほど続く海拔高度20mほどある(上掲地図)。バリナーダキの頂上部はノコギリ歯状になっていて南北の両端に向かって緩やかに低くなっている。バリナーダキの尾根の北西部にはV字形の大きな割れ目がある。この割れ目は遠くからも視認できる。

バリナーダキの北東側崖面は植生の被覆の見られない平滑状の岩壁をなしていて東方の遠方からも確認できる〔池間漁港の整備以後は植生の被覆で露出した岩壁部分は減少している〕。

バリナーダキの西側での石灰岩堤の比高は10m未満と思われる(図. 3)。その表面状態については、ウハルズより奥が立ち入り禁止区域^{※7}であり樹木も生い茂っていて直接確認することはできない。

ところで、ウハルズの南に隣接する池間遠見跡付近の琉球石灰岩堤の表面はごつごつしている。さらに宮古島の西に位置する来間島の集落東側にある断層起源の琉球石灰岩堤は、東側がほぼ垂直の崖の平滑な岩壁で、西側(集落側)は若干の出入りのある平面形をなすごつごつした表面になっている。

これらのことからバリナーダキの西側も同様に出入りのある平面形をなすごつごつした表面になっていると思われる。

ウイバルヤマにはさまざまな樹種が繁茂し樹高も概ね揃っていて、バリナーダキの頂上を越えた高さの樹木は見られない。

バリナーダキの東方には、島を二分する入り江(地元名はイーヌブー。現在は池間湿原ともいう)があった。この入り江は、島の南東部から北西へそして中間部で北に向けて北海岸近くまで入り込んでいて干潮時には干潟を形成していた。開口部の南側には仲間越があり、入り江に150mほど入った西岸の一部はバリナーダキの麓近くまで湾入していた(現在は埋立地)。

ウイバルヤマの西にはノッチの発達する海岸が続く、その前は北西方向に湾入する入り江(地元ではミジュンマブーという)がある。ウハルズ入り口から南へ数十m行った海岸には、ポケットビーチの付随する海食洞が2カ所ある。入り江の奥には長さ数十mの砂浜があった(現在、護岸設置)。砂浜の後方(北)に現在集落がある。入り江西側を境する小岬もノッチが発達している。ミジュンマブーは、干潮時にも干上がることはなく往時の大型船の停泊も可能な水深である。

ウイバルヤマを風との関係で見ると、冬季の冷たい風は北東方向から吹いてくることが多い。冬季の風はバリナーダキに遮られ、その西側にあるウイバルヤマは風が弱くなる。

ウイバルヤマ及びその周辺には、多孔質の琉球石灰岩が分布していることから地下水の湧出は見られない。

範囲を広げて池間島の海岸の状況を見ると、北東～北～北西の海岸は、海拔高度数m～20mほどの海崖が断続的に続く。西～南の海岸は数m以下のノッチの発達した海岸が続く。海岸には主にアダンが繁茂し、台風の常襲地域であることもあって高木は見られない。

〔人文環境〕

ウイバルヤマ一帯は、ウイバルという小地名で呼ばれ古い集落があった。集落跡はウイバルヤマの南隣りにあり、その遺構が残っている。集落跡後方(東側)の琉球石灰岩堤上には、烽火の制(1644年)によって遠見を行う場所が設置された。集落跡の西側の海岸にある海食洞のポケットビーチはトゥマイ(泊)と呼ばれている。トゥマイとは船着き場を意味する池間島の言葉で、ここから琉球王府への上納品が積み出されたという言い伝えがある。

一方ウイバルヤマの北西端(現集落側)の境界には高さ2mほどの塔状の琉球石灰岩の裸岩があり池間島の言葉でフギスと呼ばれている。フ

ギス付近で、ウイバルヤマの方角(東の方角)に向かって合掌をしていたと伝えられている。フギスは聖域と俗界の境界、すなわち結界を示していると言える。

池間島から約13 kmほど南、宮古島の北西海岸には宮古地域における古くからの主邑である平良と漲水港(平良港)がある。1648年に薩摩藩によって作製された「国絵図」には、はり水の泊(漲水港)と沖縄本島的那覇湊との間(慶良間諸島の阿嘉島経由)を結ぶ航路が朱線で示されている(『琉球国絵図史料集第一集』p. 84。以下『国絵図』と略す)。この航路では、沖縄本島からの船は北東方向から宮古諸島の北部海域に接近して八重干瀬の北側または南側を通過して池間島の北に進み、池間島を迂回して宮古島北部の半島部と伊良部島の間を通過してはり水の泊に向かう経路になっている(『国絵図』p. 86、87)。

また「国絵図」では、池間島と宮古島北端・大神島、大神島と宮古島(島尻)、宮古島のはり水と伊良部島・多良間島・水納島・石垣島との間にそれぞれ航路が朱線で示されている(『国絵図』p. 86、87)。池間島の船着き場は仲間越(旧池間漁港、古名はナカドゥマイ^{※9}といた)に同定される場所である。

はり水の泊(漲水港)に南接する平良は海拔高度20m^{※10}ほどの台地上にあり、その市街地内の住屋遺跡から12世紀の九州系の石鍋が出土している(『みやこの歴史』p. 47～48)。

「国絵図」には、池間島及びその周辺には、「まさか埼」「さゝれ崎」「かりまた」「せとの崎」など複数の地名が見られる(『国絵図』p. 86、87)。池間言葉では、まさか埼はマサカダツ、さゝれ崎はツサイヌトゥガイ(池間島西端の小岬)、せとの崎はシドゥ(世渡崎)と言う。これらの岬地名は、沖縄本島から宮古島北西岸にある漲水港に向かう航路から視認できる位置にある。

4 沖縄県内の御嶽などの地理的環境

「由来記」によるとウハルズの神はウイバルヤマの山頂に降臨した。その際に依り代にした自然的特徴を推測するために、県内に所在するいくつかの御嶽・陵墓及びその周辺の地理的環境について見ていく。

ここでは、「由来記」及び“おもろ”に見られる神の降臨の記述が見られる御嶽などや文献史料には明確な記述は見られないが神〔太陽神〕との関係性を意識している^{※11}と思われる陵墓を対象とする。

なお本稿では、“ぐすく”を信仰的側面での空間範囲の意味で、“グスク”を城の意味で用いる。したがって両者の空間的範囲は異なる。また本稿ではウハルズ以外は「おもろさうし」・「由来記」などの史料における名称で表記する。

① 安須杜(辺戸御嶽)

安須杜は沖縄本島最北端の辺戸岬の南およそ2 kmに位置する。最高海拔高度が248.3 mの塊状の高まりである。本部石灰岩からなる衝上断層で形成された地形である。この高まりには、北東方向からは山頂高度のほぼそろった山形の裸岩の高まりが三つ視認できる。周縁部は北～北東～東側と西側の一部が崖、それ以外は斜面地からなり、周囲から遠望すると明確に区別できる孤立した存在である。平滑な崖面や稜線は植生に覆われることなく北東方角の海上からも視認できる(写真. 2)。

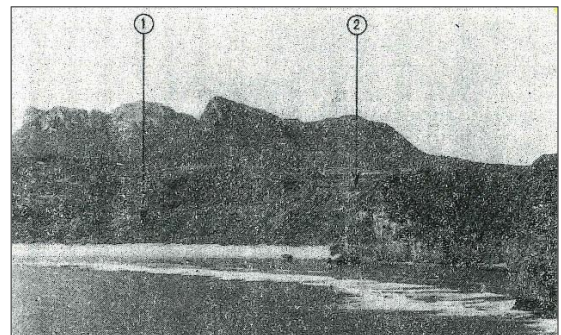


写真. 2 安須杜
(『国頭村史』p. 9より)

崖下の樹林地にはその一帯に広がる樹冠を突き抜けたような高木となる樹種の生育は考えにくい。

「国絵図」には、安須杜の西方海上を通る与論島と今帰仁村・運天港を結ぶ航路が描かれている〔『国絵図』pp. 58～59、60〕。安須杜は九州から島伝いに南下してくる帆船にとって遠方海上からも視認できる目立つ景観であったと思われる。今帰仁村のコバウノ嶽と関係があり^{※12}（『由来記』pp. 498～499）、杜内にはアフリ嶽と宜野久瀬嶽がある。宜野久瀬嶽での祈願の際の唱え言葉には船の航海安全に関する内容が含まれている^{※14}（『由来記』p. 499）。

また琉球王府編纂の「おもろさうし」には、安須杜の北東に面する崖面を“切り口”と表現している（『おもろさうし(下)』p. 46）。また喜界島から那覇泊（那覇港）に至る島伝いの航路を詠んだおもろにも安須杜が見られる（上掲書pp. 73～74）。

明治時代に刊行された水路誌には、安須杜がその具体的な海拔高度とともに古くから航海者が目標にしていたということが記されている（『環瀛水路誌』p. 799）。

崖下の傾斜地の樹林地内には義本王の墓がある。鞍部を隔てた東方には辺戸集落がある。

② コバウノ嶽（クボーヌ御嶽）

コバウノ嶽は、今帰仁村今泊集落の南およそ1.4kmの尾根部の頂上にあり、北東750mほどには今帰仁城跡がある。地質的には硬質の本部石灰岩からなり、当該尾根は東西1km以上あり北側斜面は比高数十mの急斜面をなす。北方向から見た当該尾根の稜線中央部に遠方からも視認できる円い頂の高まりがあり（写真. 3）、その北側の頂に近い急斜面地にイベ（祈願所）がある。

イベのある場所は、幅15m・高さ6mほどの崖状になっており、その基部には高さ1m余り・幅2mほどの塊状の岩壁があり、それに長さ2

m・厚さ15cm程の板状の岩が斜めに覆い被さっている。この岩と塊状の岩との隙間に石製香炉が5個置かれている。香炉の置かれている塊状の岩の手前は狭い平場状になっている。



写真. 3 コバウノ嶽
（北東方角（今帰仁城跡）から）

尾根は全体が樹木で覆われており、イベ一帯は植生はまばらで樹間から北の海上が見える。しかし、海上からイベ一帯の崖状地形の視認は困難と思われる。

また沖縄県全域が台風襲来地域であることから、当該御嶽を含む一帯に広がる樹冠から突き出た高木の生育は厳しいと思われる。

この御嶽は琉球開關の七嶽の一つであり、今帰仁村〔現・今泊集落〕の人々が特定の日に参拝していた^{※16}。

「国絵図」には、運天港～与論島、運天港～伊平屋島、運天港～には入江（渡久地）を結ぶ航路が描かれている^{※17}。これらの航路を通る船舶からはコバウノ嶽の位置を示す円い頂が視認できたと思われる。そのことは、コバウノ嶽が航海の山当てであることを詠んだおもろがある（『おもろさうし(下)』p. 109）ことからわかる。

また「由来記」には、コバウノ嶽での祈願の際の唱え言葉に船の航海安全に関する内容が見られる^{※19}（『由来記』p. 466）とともに、沖縄本島最北端近くにある安須杜との関係性を示す内容の

記述もみられる^{※20}(上掲書 pp. 498～499)。

③ 首里杜ぐすく(京ノ内)

首里杜ぐすくは、沖縄本島南部の那覇市首里にある首里城跡内にある。

首里城跡は、海拔高度 120～130m余の東西方向に延びる琉球石灰岩から成る尾根の東寄りの海拔高度 136m余の位置にある^{※21}。

城跡内の南西部に位置する小高い岩山の海拔高度 136mのピークが首里杜ぐすくの位置である(このピークは現在は城壁の一部に取り込まれている)(写真. 4)。この岩山の南側は比高数mの垂直上の崖となっている。崖面は、崖下には植生が繁茂してその状況は確認できないが、真玉杜ぐすくなど周辺の崖面の状況から平滑状の岩壁になっていると思われる。



写真. 4 首里杜ぐすく
(北西方向から)

このぐすく一帯では、沖縄本島が台風の襲来地であることから突出した高木の生育は考え難い。

首里杜ぐすく一帯は、現在“南のアザナ”や城壁・園路などが整備されていて樹木の繁茂は見られない。自然状態であれば首里杜ぐすくは樹林地内にあると思われる。

首里杜ぐすくの北隣りには石垣囲いの“首里森御嶽”があり、さらにその北側には首里グスクで重要な聖域“京ノ内”がある。首里杜ぐす

くの西約 40mには真玉杜ぐすくがある。

「おもろさうし」には、首里杜ぐすくが真玉杜ぐすくとともに首里グスクにおける神の降臨する場所として詠んでいるおもろがある^{※22}。

「由来記」では首里杜ぐすくはアマミキヨが創建したとされている^{※23}。

首里杜ぐすく及び真玉杜ぐすくが神の降臨地に選定された理由についての記述は、「由来記」だけでなく琉球王府の正史「球陽」にも見当たらない。

④ 真玉杜ぐすく(京ノ内)

首里城跡内の南西部にある。東約 40mに首里杜ぐすくがあり、海拔高度は首里杜ぐすくより数m低い。最大比高 3～4 m・幅 10mほどの西向きの崖面があり、その崖面の岩壁には植被はほとんど見られない。この崖の西端近くの基部には洞穴がある(写真. 5)。また崖の左側後方(東方)に比高 3 mほどの裸岩の岩がある。



写真. 5 真玉杜ぐすく
(西南西方向から。右下の柵が洞穴入り口)

このぐすく一帯は、隣接する首里杜ぐすくと同様に突出した高木の生育環境ではない。

崖の基部にある洞穴は王統が政変によって第一尚氏から第二尚氏に変わる際に第一尚氏後継者などの終焉の場所だという^{※24}。

真玉杜ぐすくの北西隣りには石垣囲いのある“真玉城ノ御嶽”^{※25}があり、北側には首里グスク

で重要な聖域“京ノ内”がある。真玉杜ぐすくの東方約40mには首里杜ぐすくがある。

「おもろさうし」には、真玉杜ぐすくが首里杜ぐすくとともに首里グスクにおける神の降臨する場所として詠んでいるおもろがある。^{※26}

「由来記」には真玉杜ぐすくはアマミキヨが創建したとされている。^{※27}

真玉杜ぐすく及び首里杜ぐすくが神の降臨地に選定された理由についての記述は、「由来記」だけでなく琉球王府の正史「球陽」にも見当たらない。

⑤ 大庫理（斎場御嶽）

大庫理は、沖縄島南東端に位置する琉球王府^{※28}に関係の深い斎場御嶽内にある6カ所の拝所の一つである。斎場御嶽では琉球王国時代には王国最高位の女神官である聞得大君の御新降りの儀式（就任儀式）が行われていて、東方海上には久高島が見え、南西数100mには久手堅集落がある。

大庫理は、海拔高度90mほどの島尻層（泥灰岩）からなる台地上に散在する複数の琉球石灰岩の巨岩の基部に設けられている。

大庫理は、斎場御嶽の入り口の“御門口”を左に曲がりながら石敷きの参道を数十m上がっていくと正面に見える位置にある。

大庫理は、東西50m・南北20m・高さ8mほどの巨岩の東端基部に設けられた拝所である。拝所背後の岩壁は高さ・幅とも数mの概ね平滑な立面になっており、その表面には植生は見られない（写真. 6）。^{※30}

岩壁の基部には石製の香炉が置かれ、その前面には5m四方の広さの基壇がある。

大庫理では、王国時代には聞得大君の御名付の儀式が夜12時頃から午前3時頃までの間に行われていた。^{※31}

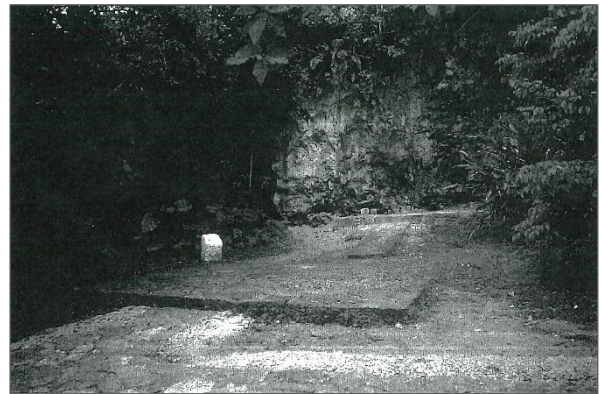


写真. 6 大庫理

（『国指定史跡 斎場御嶽 整備事業報告書（工事・資料編）』p. 8より）

⑥ 三庫理（斎場御嶽）

三庫理は、斎場御嶽内にある拝所の一つである。斎場御嶽内にある拝所では最も東に位置する。比高が15mほどの円錐形状の琉球石灰岩の岩の東側直下にある。この岩の頂はチョウノハナと呼ばれ、その東側斜面の下部は高さ・幅とも数mの大きさの垂直な平滑面からなる（写真. 7）。この平滑面は、斎場御嶽から東南東方向に数百m離れた知念岬からは視認できない。



写真. 7 三庫理

写真右上が平滑な岩壁でその上にチョウノハナがある（『国指定史跡 斎場御嶽 整備事業報告書（工事・資料編）』p. 9より）

その平滑面の前面には広さ数 m^2 の石敷きの広間があり、北側にある三角形のトンネルをくぐり抜けて入る。このトンネルは胎内くぐりを思わせる。

この広間内は全面が石敷きになっており、平滑面の直下の基部には石製の香炉が置かれており、具体的な拝みの位置を示している。平滑面の対面(東側)は幅2~3mほど開けていて東方に海が見え、その両側は高さ2m以上ある岩壁となっている。その2つの岩壁の間は高さ数十cmの岩でつながっており、その上には石製の香炉が置かれている。

また三庫理の敷石の下からは鍍金製の勾玉が発掘されている。

「国絵図」には、久高島と斎場御嶽の南の海岸を結ぶ航路が描かれている(『国絵図』p. 69)。

伝承では、チョウノハナに降臨した神は南面する平滑な立面をつたって地表面に降りるといふ。

「おもろさうし」には、三庫理に神が降臨すると認識されていたことを思わせるおもろが見られる。^{※32}

⑦ 知念杜ぐすく(知念城跡)

知念杜ぐすくは、沖縄本島南部の東端・知念岬の南西約2km、海岸から700~800mほど内陸部(西方角)にある。本稿では知念グスク及びその西方にある崖の一部〔神の降臨地と認識されていた推測される場所〕を含む一帯を知念杜ぐすくと捉えている。

知念グスクは勾配の急な斜面の一部が琉球石灰岩のテラス状になっている海拔高度90m程の場所に位置している。その数十mほど北西には比高20~30mの琉球石灰岩の崖が多少の出入りはあるが北東から南西に概ね直線状に連なり、東方海域にはサンゴ礁が発達している。

知念グスクから数十mほど北北西にあつてほぼ南面する海拔高度140m前後の植生で覆われ

た連続する崖がある。その崖面の一部に稜線付近で岩壁が露出し頂が尖頂になっている部分があり、知念グスクからも視認できる(写真. 8)。この部分の崖の基部には“知念按司の墓”がある。



写真. 8 知念杜ぐすく

(東の方角(知念グスク)より。稜線中央の裸岩の凸部)

知念グスク内には友利之嶽、知念城の殿、知念番所跡がある。発掘調査で出土した遺物は12世紀以降の輸入陶磁器、グスク土器などがある。^{※33}

「おもろさうし」には、知念杜ぐすくは、あまみきよが開いたぐすくであること、神が降臨するぐすくであること、唐の船が寄るぐすくであることを詠んだおもろがある。^{※34}

「由来記」には“城内友利之嶽”での祈願の際の唱え言葉の中に航海安全に係る内容が含まれている。^{※35}

⑧ 浦添ようどれ

浦添ようどれは沖縄本島中部浦添市の北東部にある英祖王・尚寧王の墓である。墓室は、北西一南東方向に延びる海拔高度130m前後の琉球石灰岩堤の北東側の切り立った比高数mほどの崖の基部を掘り込んで築造されている(掘り込み墓)。^{※36}

崖の直上は比高数mの急傾斜をなして石灰岩

堤上面の平坦面へと続く。その平坦面周縁には浦添城跡の城壁が築かれていて、城壁に取り込まれた2つの比高が1.5mほどの塔状の琉球石灰岩の岩が東西に隣接してある。この2つの岩がある周辺は、北から墓室方向を遠望したときに高まりを成し概ね墓室の直上の位置にあるように見える(写真. 9)。



写真. 9 浦添ようどれ

(『裏添ようどれⅢ』p. 219 より)

墓室の前面には石垣で囲まれた一番庭があり、石垣の北西部にはアーチ門(ナーカ御門)がある。

アーチ門の外側にも石垣で囲まれた二番庭があり、北西部には“暗しん御門”がある。暗しん御門は胎内くぐりを思わせる。

現在の石垣及び暗しん御門は、戦災で破壊されたものの復元である。以前の暗しん御門は、オーバーハングした岩盤と石積みでトンネル状になっていた。

「由来記」には英祖の陵墓は咸淳年間(1265～1274)に造営されたと記されている。

⑨ 玉陵

沖縄本島南部那覇市首里にある琉球王統第二尚氏王統の陵墓で、東方200mほどには首里城跡がある。海拔高度120～135mの東西方向に延びる琉球石灰岩から成る尾根の西寄りの海拔高度120mほどの位置にある。東西方向の長軸30m・短軸10m・高さ7mほどの大きさの琉球石

灰岩の岩山に造られた掘り込み墓である。

当該岩山の当初の具体的な形状は、人工物でほぼ覆われていることから定かでないが、南側は直線状の石垣が築かれていることから東西方向に延びる立面であると推測される。そしてその立面は、植生による直接の被覆はなかったであろうことは、琉球石灰岩地域に多く見られる岩山・巨岩・崖面の平面には植生による被覆が無い事例が顕著であることから類推される。

墓室は東室・中室・西室の3室あり、中室は遺骸を安置し殯を行う室で、東室には王・王妃の遺骨が、西室には王・王妃以外の王族の遺骨が安置されている。中室の右側後方の墓城南側の石垣との間には高さ1mほど(地面からの高さは6.5mほど)の錘形の裸岩の岩がある(写真. 10)。

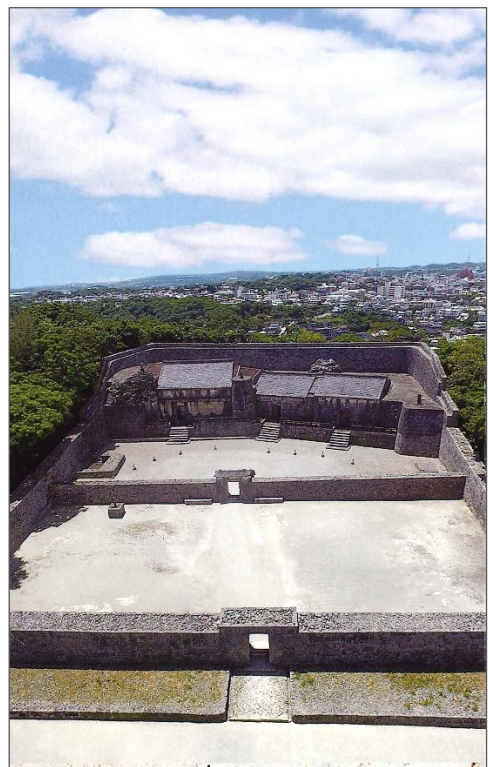


写真. 10 玉陵

(「玉陵」パンフレットより)

「由来記」には、玉陵は1501(弘治14)年に尚真王が造営した(『由来記』巻三 p. 84)と記さ

れているが、その位置の選定理由についての記述は見当たらない。風水による見方では首里城とともに良好な場所に位置しているという記述はある(上掲書巻六 p. 163)。しかし琉球王国に風水が取り入れられたのは 1667(康熙六)年のことである(上掲書巻四 p. 129)。

⑩ 伊是名玉御殿

伊是名玉御殿は、琉球王国の第二尚氏王統に関係の深い墓で、沖縄本島最北端の辺戸岬の西方およそ 30 kmに位置する伊是名島の南東海岸の城崎岬にある。海拔高度 98mの孤立した概ね円錐状の裸岩の岩山の北側斜面の麓に位置している(写真. 11)。岩山全体が硬くて風化に強い岩質のチャートからなり、北側斜面の中腹には遠くからも視認できる垂直状の平面の岩壁がある。その岩壁の直下の人工的な平坦面に伊是名玉御殿は設けられている。



写真. 11 伊是名玉御殿

(『伊是名村史・上巻(島のあゆみ)』グラビア写真より)

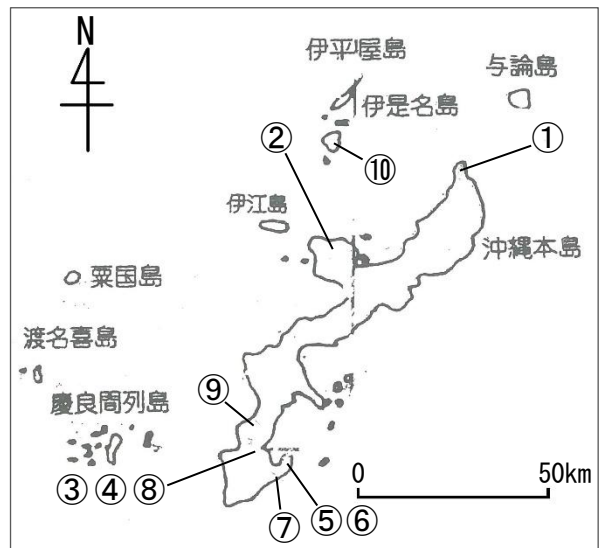
伊是名玉御殿のある岩山の北方約 100m の海上には“神降り岩”と呼ばれる離れ岩がある。

「由来記」には、伊是名玉御殿について「伊是名ノ海涯、岩カケノ嶺ノ麓ニアリ。戊亥ノ方ニ向、〈中略〉尚眞王御代ニ、御建立為被遊由、傳アリ。〈後略〉」(『由来記』巻十六 p. 517)という記述が見られる〔下線は引用者〕。また同史料には、番所での初願の際の唱え言葉に安全航海に関する内容が記されている^{※40}。

「国絵図」には、伊是名島東方近海を通る硫黄島～伊平屋島～本部半島を結ぶ航路が描かれている^{※41}。

5 ウイバルヤマ及び県内の諸御嶽などに見られる地理的特徴

前述の沖縄本島等のいくつかの御嶽・陵墓の位置を示したのが第4図で、それらとウイバルヤマの特徴をまとめたのが表である。



第4図 御嶽・陵墓の位置図

- ①安須杜 ②コバウノ嶽 ③首里杜ぐすく
- ④真玉杜ぐすく ⑤大庫理 ⑥三庫理
- ⑦知念杜ぐすく ⑧玉陵 ⑨浦添ようどれ
- ⑩伊是名玉御殿

表 ウイバルヤマ(ウハルズ)及び県内諸拝所等の地理的環境の諸特徴

名称	概要(位置・地理的環境・文献史料の記述内容など)。
ウイバルヤマ (ウハルズ)	宮古諸島池間島〔宮古島市池間島〕。東境は断層地形の概ね北西―南東方向の琉断石灰岩堤で、海拔高度 20 m・長さ 200 mほどで、V字状の大きな割れ目がある。この堤の北東側崖面は平滑で植生の被覆はなく東方の海上からも視認できる。堤の西側のウハルズのある樹林地には顕著な高木はない。高原山(ウイバルヤマ)に神は降臨し航海安全の神となる(「由来記」)。池間島の東～北～西を通る航路がある(「国絵図」)。
安須杜	沖縄本島北部〔国頭村辺戸〕。最北端の辺戸岬の南およそ 2 km。最高海拔高度およそ 250 mの北東方角に面する断層崖。崖上には3つの三角形の岩山があり北～北東方角の海上からも視認できる。平滑な崖面及び3岩山は裸岩。崖下の斜面は顕著な高木は見られない樹林地で拝所および義本王の墓がある。 「由来記」にはアフリ嶽と宜野久瀬嶽で安須杜を表し、前者は神の降臨と今帰仁村のコバウノ嶽と関係があり、後者は航海安全と関係が深い。「おもろさうし」では崖面を“切り口”とし、切り口＝安須杜としている。喜界島から那覇港までの島伝い航海を詠んだおもろに安須杜が見られる。「国絵図」には与論島～運天港を結ぶ航路が見られる。
コバウノ嶽	沖縄本島の本部半島北側〔今帰仁村今泊〕。海拔高度 200 m余りの円い頂の高まりは北の海上から視認できる。その頂付近北側の急傾斜地に幅 15 m・高さ 6 m程の崖状地形がありイベ(祈願所)がある。尾根全体が樹木で覆われており、崖状地形は北の海上からの視認は困難。「由来記」には神が降臨すること、辺戸の安須杜と関係があること、祈願時に航海安全に係る言葉を唱えることが見られる。「国絵図」には北の海上に複数の航路が見られ、この御嶽を“山当て”として詠んだおもろが見られる。
首里杜ぐすく	沖縄本島南部〔那覇市首里〕。首里城跡の南西側城壁にある“南のアザナ”一帯を指す。海拔高度 136 mの尖頂。東西方向に延びる琉球石灰岩の尾根上にある岩山で、北側は急斜面で南側は平滑な岩壁(崖面：推測)。西隣りには真玉杜ぐすくがある。自然の状態であればこのぐすく一帯は樹木で覆われると思われる。神の降臨についてのおもろもある。アマミキヨによる創設。
真玉杜ぐすく	沖縄本島南部〔那覇市首里〕。首里城跡の南西側城壁近くにある。首里杜ぐすくより数m低い位置にある。西面する岩壁とその背後にも北西に面する岩壁状の裸岩がる。この岩壁の南端の基部に“真玉城ノ御嶽”(洞穴)がある。この洞穴は、政変の際に第一尚氏王統の後継者たちが隠れた場所であり、かつ終焉の地でもある。神の降臨についてのおもろがある。アマミキヨによる創設。

大庫理	沖繩本島南部〔南城市久手堅〕。海拔高度 90 m ほどの台地上にある比高数 m の巨岩の垂直な岩壁の基部に拝所がある。岩壁はほぼ東面し、拝所の前面には数 m 四方の基壇があり、ここで聞得大君の“御名付け”の儀式が夜 12 時頃から行われた。
三庫理	沖繩本島南部〔南城市久手堅〕。最高海拔高度 100 m 余り。比高 10 m 余り錐形状の岩山の頂がチョウノハナと呼ばれ、その東側斜面の下位部分は数 m の概ね平滑な崖をなし、頂から東側斜面・崖基部まで植生による被覆はなく、頂から東側斜面は知念岬から視認できる。崖の直下の石敷きの広場空間が三庫理。崖の基部には石製香炉が設置。「国絵図」には久高島～斎場御嶽南海岸を結ぶ航路あり。神の降臨について詠まれたおもしろがある。聞得大君の“御新下り”の儀式の拝みの場所の一つ。
知念杜ぐすく	沖繩本島南部〔南城市知念〕。海岸からおおよそ 700 m 内陸・海拔高度 90 m ほどに知念グスクがあり、さらに西方 100 m ほどに海拔高度 140 m・比高 20 ～ 30 m ほどの植生で覆われた連続する崖がある。その一部に裸岩の尖頂とその直下に岩壁が露出した箇所があり、知念グスクからも視認できる。その崖の基部に“知念按司の墓”がある。知念グスクからは 12 世紀以降の輸入陶磁器が出土しており、城内には友利之御嶽があつて祈願時の唱え言葉に航海安全の内容が含まれている。知念グスク東方の傾斜地に知念集落がある。
浦添ようどれ	沖繩本島中部〔浦添市仲間〕。海拔高度 130 m ほどの北西―南東方向の断層崖。北東に面する比高数 m の崖面、浦添ようどれの背後の東寄りに岩山の高まり (1.5 m ほどの高さの塔状の岩が 2 つ)。二番庭へ向かう通路の一部にはトンネル状の“くらしん御門”がある。「由来記」には英祖王の墓は 13 世紀後半に創建とあるが位置選定についての記述はない。英祖王の墓の東隣りには尚寧王の墓がある。
玉陵	沖繩本島南部〔那覇市首里〕。海拔高度 120 m ほどの琉球石灰岩の尾根上にある長軸 30 m・高さ 7 m 余りの琉球石灰岩の岩山を利用した掘り込み墓で、1501 年に築造。この岩山の背面(南側)は、墓域を囲む石垣の形状及び周辺に見られる崖面の形状から平滑な岩壁と推測される。中室背後の右側に高さ 1 m 余りの錐形状の裸岩あり。「由来記」には位置選定の理由の記述はない。
伊是名玉御殿	沖繩本島北端の西方 30 km に位置する伊是名島の南東端の岬にある。陵墓は、最高海拔高度 98 m のチャート質の錐形状の岩山の北側麓にある。イワヒバの群落地で、墓の背後は高さ数 m の平滑状の岩壁の露出があり、北方向の遠方からも視認できる。「国絵図」には硫黄島～伊平屋島～本部半島を結ぶ航路が見られる。「由来記」に「岩カケノ嶺ノ麓ニアリ」と記述。

御嶽と陵墓は、創建の目的が別であるが両者とも岩山に立地する。このことは両者の立地の選定理由に共通点のあることを示唆しているように思われる。そこで、ここでは両者に見られる諸特徴について本稿の目的に沿った観点から以下で見ていく。

(1) 地形的特徴の観点から

ウイバルヤマ及び沖縄本島・伊是名島における御嶽・陵墓の位置する場所の地形的特徴として、次のような共通点が見られる。

① 平滑状の岩壁・崖面がある。

規模はさまざまであるが、いずれにも見られる(首里杜ぐすく・玉陵は推測)。その面の向いている方向は特定の方角に決まてはいない。付近の海上から視認できるのはウイバルヤマ・安須杜・コバウノ嶽・三庫理(の一部)・知念杜ぐすく・伊是名玉御殿である。これらのうち伊是名玉御殿のみが陵墓である。

また「おもろさうし」では安須杜の崖面は“切り口”と記されている。この切り口については、“あきり口”という言葉を含むおもろがあつて、それは「ニライカナイからの上がり口」の意味である^{※42}ということから、地形的特徴を表すだけでなく“沖縄島への入り口”の意味があると思われる。

② 稜線が凸形になっている。

岩壁・崖面のある岩山を、岩壁・崖面の向いている方角から見たときの稜線の形状が凸形になっている。稜線に明確な山形が見られるタイプ(山形タイプとする)と、明確な山形の稜線の見られないタイプ(非山形タイプとする)に分けられる。

山形タイプとして安須杜・コバウノ嶽・首里杜ぐすく・真玉杜ぐすく・三庫理・知念杜ぐすく・玉陵・伊是名玉御殿が含まれる。玉陵では意図的に錐状の裸岩部分が削平されずに残されたと考えられる。コバウノ嶽以外は、頂上部は

植被の見られない岩山になっている。

非山形タイプとしてウイバルヤマ・大庫理が含まれる。

浦添ようどれは明確な山形にはなっていないが、崖面上に高まりがあつてそこに2つある高さ1.5mほどの塔状の岩があることを考慮すると山形タイプと見なすことも可能と思われる。

(2) 植生の生育の観点から

沖縄県の高湿多湿の気候条件は、植物の生育に向いており地表には植生が繁茂するのが通常である。一方毎年のように襲来して来る台風は顕著な高木の生育を妨げる。

このような気候条件下で、植生が繁茂している中で植生による被覆が見られない岩壁(崖面)や凸形の稜線は特徴的な景観と言える。このような岩壁・崖面は、島伝い・海岸伝いに航行する船舶にとって陸上の目標物(山当て)となりうる。これに該当するのがウイバルヤマ・安須杜・コバウノ嶽・三庫理・知念杜ぐすく・伊是名玉御殿である。知念杜ぐすく以外は、近海を通る航路が「国絵図」に見られる。

(3) 人文環境の観点から

「おもろさうし」または「由来記」において神の降臨が明記されている御嶽などは、ウイバルヤマ・安須杜・コバウノ嶽・首里杜ぐすく・真玉杜ぐすく・三庫理・知念杜ぐすくである。大庫理では聞得大君の“お名付け”の儀式が神の降臨を前提にして行われている。

「国絵図」において、近海に航路が見られるのはウイバルヤマ・安須杜・コバウノ嶽・三庫理・伊是名玉御殿である。

これらのうち安須杜・コバウノ嶽・知念杜ぐすくでは祈願のときの唱え言葉に航海安全に関する内容が見られる。同様の内容は、伊是名玉御殿のある伊是名島でも番所における祈願時の唱え言葉にも見られる。

また陵墓も一般の人々の信仰の対象となり、

一般の拝所と同じように祈願所として認識されている。

祭祀の行われる位置(イベ:祈願所)は、崖面・岩壁の前面に設けられている場合と、その背後の斜面地または平場に設けられている場合に分けられる。前者には安須杜・コバウノ嶽・真玉杜ぐすく・大庫理・三庫理・知念杜ぐすく・浦添ようどれ・玉陵・伊是名玉御殿が、後者にはウイバルヤマ・首里杜ぐすくがそれぞれ含まれる。

6 考察～ウハルズの神の依り代は何か

来訪神は山や岩・樹木・離れ岩など様々な自然物に依り付くとい^{※43}う。

ウイバルヤマの景観の中に神の依り代に相応しい場所を見出して降臨した神は、ウハルズの神となった。この神と同様の来訪神が降臨したという御嶽が沖縄本島にも首里杜ぐすくを初め複数あることは前述の通りである。

ウイバルヤマとこれらの御嶽の景観で共通して見られる特徴は、露出した岩壁・崖面の存在と突出した高木が見られないことである。このような景観は、神の降臨の伝承のある御嶽のみに見られるものではない。

このことは、神の依り代に適う場所には露出した岩壁・崖面とその他の要件が必要であることを示していると言える。その要件には自然的条件と人文的条件が考えられることから、分けて検討していく。

(1) 自然的条件の観点から

ウイバルヤマ及び安須杜・首里杜ぐすくなどの御嶽に見られる露出した岩壁・崖面に係る自然的条件について以下で見ていく。

① 海拔高度・比高について

海拔高度はウイバルヤマ(ウハルズ)の約 20mから安須杜のおよそ 250mまでと 200m以上の差がある。比高も数mから数十mと幅がある。

海岸付近にある御嶽は、遠くの海上の船舶か

ら視認できる高さに位置している。ウイバルヤマも海岸近くにあつて、高度は低いが東方海上からその位置は確認できる。

一方、内陸部にある御嶽は、尾根上にあつて周囲から高くなっている岩山にある。これらの御嶽は、自然環境下では樹林地内に立地するので海拔高度が高くても遠方からは岩壁・崖面の視認は困難である。

これらのことから神の依り代に適う海拔高度・比高の数値的基準はないと考えられる。周囲から目立つ特徴を有して目標物となり得る自然物が神の依り代として理解されていたと思われる。

ウイバルヤマの露出した岩壁・崖面＝バリナーダキの平滑な面の海拔高度・比高は、ウハルズの神が航海安全の神であることと関係し、東方海上から視認できることが必要であったと考えられる。

② 岩質について

露出している岩壁・崖面は、その形状が長く維持され続けられる硬い岩質の琉球石灰岩・本部石灰岩に形成されている。このことはその形状を長期にわたって維持することが可能な岩であることが必要であることを示していると考えられる。

神は変わらない存在として認識され、その依り代にも不変性が求められたと考えられる。このことは、神の依り代として風化しにくい硬い岩質からなる露出している岩壁・崖面が選択されたことにつながったと思われる。

影向石・護法石などと呼ばれる石や花の窟などの岩壁が信仰の対象になっている事例が東北から九州まで広く見られる。それらは風化しにくい硬い岩質からなる。

ウイバルヤマのバリナーダキは固い琉球石灰岩からなり、神の依り代に適う岩質と言える。

③ 大きさ・立面形について

ウイバルヤマや安須杜の岩壁・崖面は、沖合からも明確に視認できる大きさで、形は横長である。この2カ所に比べてその他は小規模で、形は概ね縦長である。

このことから、露出している岩壁・崖面は、立面形や大きさは様々で、決まった大きさ・立面形はないと考えられる。

ウイバルヤマのバリナーダキは、安須杜と同様に航海安全に関係することから、遠くの海上からも視認できる大きさであることが求められたと思われる。これは航海者の視点と言える。

④ 面の向いてる方角について

岩壁・崖面は、すべてが特定の方角に面しているわけではない。安須杜は北東に、三庫理は東に、知念杜ぐすくは南東に、コバウノ嶽は北にそれぞれ岩壁・崖面が面している。これらはそれぞれに近い海域の方角に面している。

このことは、安須杜・コバウノ嶽・知念杜ぐすくでの祈願時の唱え言葉に航海安全に関する内容が含まれていることから、それぞれの御嶽等の神の神威が海に関係していることを示していると考えられる。三庫理も岩壁・崖面が海の方角に面していることからその神の神威も安須杜などと同様だと思われる。

また、自然環境下であれば樹林地内部に立地すると思われる御嶽の首里杜ぐすく・真玉杜ぐすく・大庫理は、それぞれ南・西・東の方角に面している。

首里グスク(首里城跡)にある首里杜ぐすくと真玉杜ぐすくは、その間が40mほどの近距離にありその岩壁・崖面は90度も向きが違う。このことは、首里グスクには複数の方角から神が訪れることを示している。言い方を変えると首里杜ぐすくの神によって南(東南アジア)から、真玉杜ぐすくの神によって西(中国)からそれぞれ豊穰がもたらされることを願う王の気持ちを反映していると思われる。

大庫理は、斎場御嶽内にあり三庫理の西方およそ50mに位置し岩壁・崖面は三庫理と同じ方角に面している。前述のとおり、三庫理の神の神威が海との関係性が考えられることから、大庫理の神の神威はそれとは異なると思われる。そのことを示しているのが聞得大君の“お名付け”の儀式がこの場所で執り行われていたことである。

海岸付近にあって露出した岩壁・崖面を海方向に向けている御嶽等は、船舶の安全航海に関する神が鎮座する。一方、林地内にある御嶽等は豊穰の神・国家儀式に係る神が鎮座する。

ウイバルヤマは、安須杜やコバウノ嶽・三庫理と同じように露出した岩壁・崖面の面している方角の海上に航路が通っている。このことは、ウハルズの神が航海安全の神であることとは無関係ではないと考えられる。

⑤ 表面状況について

露出している岩壁・崖面の表面は、概ね滑らかである。基部に浅いくぼみが見られる事例もあるが、面全体が凸状又は凹状になっている事例は見られない。ただしコバウノ嶽の場合、滑らかな面は基部の部分だけである。

このことから、露出している岩壁・崖面の表面は滑らかな面であることは必要な条件と考えられる。

日本では、神の依り代と考えられている自然物には特徴ある地形や離れ岩(島)・滝・池など様々ある。特に多いのが山中に見られる大きな露出した岩や岩壁である。花の窟^{*44} (三重県)などのように露出した岩壁の事例も見られる。

ウイバルヤマの露出した岩壁・崖面、すなわちバリナーダキの北東に面する平滑面は、景観的には花の窟と同じ範疇に属する。

両者を神の依り代の観点からみると、花の窟は現在でも2月・10月に“御綱掛神事”が行われていて神の依り代と認識されている^{*45}。一方バ

リナーダキの平滑面の前では祈願しないが、地元ではスマヌンミ(島の嶺)と呼ばれて特別視されている。^{※46}

これらのことからウハルズの神は、ウイバルヤマの露出した岩壁・崖面、すなわちバリナーダキの平滑面を目標に降臨したと考えられる。

⑥ 岩壁・崖面の上位の高まりについて

遠方から見たときに露出した岩壁・崖面上の一部が山形の高まりになっている場合とそうでない場合がある。

コバウノ嶽・三庫理・知念杜ぐすくにはそれぞれ一つ、安須杜には三つの山形の高まりが見られる。山形の高まりは、コバウノ嶽は樹木で覆われた円頂をなし、それ以外は裸岩の尖頂となっている。

一方、大庫理のように山形の高まりは見られない事例もある。

また首里杜ぐすく・真玉杜ぐすくは自然状態では樹林地の内部にあって露出した岩壁・崖面上に山形の高まりが見られる。大庫理は樹林地の内部にある。

以上のことから、露出した岩壁・崖面上の山形の高まりは来訪神の依り代の必須条件とは言えないと思われる。

これまで述べてきた①～⑥のことから、ウイバルヤマに降臨してウハルズの神となった来訪神は、バリナーダキの露出した岩壁・崖面を依り代(磐座)^{いわくら}にしたと考えられる。

(2) 人文的条件の観点から

御嶽に関係する人文的事象について、ウイバルヤマに見られる事象との共通点の有無について見ていく。

① 祈願所の位置について

ここで言う祈願所の位置とは、岩壁・崖面を基準にしてその前側か後ろ側の位置を指す。

前側の事例として安須杜・コバウノ嶽・三庫理・大庫理・知念杜ぐすく・真玉杜ぐすく、後

ろ側の事例として首里杜ぐすくがある。

祈願は神の鎮座する方向に向かって行う。このことから見ると、前側・後ろ側のいずれでも岩壁・崖面の方向を向いて祈願することから岩壁・崖面又はその頂上に神が鎮座していることになる。

ウハルズでは、ウイバルヤマの東境であるバリナーダキの方向に向かって祈願する。この方向は「由来記」に見られる神の降臨の場所の方向に一致する。

② 航路との関係について

安須杜・コバウノ嶽の岩壁・崖面の面する方向には航路が見られ、祈願時の唱え言葉の中に航海安全に関する内容が含まれている。このことから御嶽の中には海上交通と関係のある事例も見られる。

沖ノ島(福岡県)は九州と朝鮮半島・中国との航路上の孤島で、一ノ岳・二ノ岳・三ノ岳・白岳という岩頭〔岩壁〕があり遠くの海上からも視認できる(『神と自然の景観論』p.147)。島内には複数の磐座・磐境(神の鎮まる岩)があり、4世紀から10世紀初頭の銅鏡・鉄剣などの金属製品・ガラス製品などが出土している。古くは航海者が航海安全を祈った神の島だという(上掲書 p.146)。

ウハルズの神は航海安全の神であることからウイバルヤマも航路との関係があると考えられる。

③ 儀式の観点から

大庫理は斎場御嶽内にあり、聞得大君の“お名付け”の儀式が夜間に行われていた。

大庫理の奥側(西側)には比高数mの露出した岩壁・崖面があり、その基部に香炉が置かれている。香炉の前面には基壇が設けられている。この基壇上で、国王によって聞得大君に任命された女神官の“お名付け”の儀式が“子丑が時”(夜12時ころ)から3時間ほどかけて行われた

という。お名付けとはいわば神による任命ともいえる。子丑が時とは夜12時ころから午前2時ころまでの時間をさし、神が降臨する時間である^{※47}という。

以上のことから大庫理の露出した岩壁・崖面を目標にして夜12時ころに神が降臨すると認識されていたと思われる。

ウイバルヤマと大庫理に共通しているのは、いずれにも露出した岩壁・崖面が見られることである。このことから、ウハルズの神はウイバルヤマの東境をなすバリナーダキの露出した岩壁・崖面を目標にして降臨したと考えられる。

(3) 陵墓の観点から

太陽神崇拝が背景にあると思われる第二尚氏王統に関係の深い陵墓の自然的景観などについて以下で見ていく。

① 伊是名玉御殿について

伊是名玉御殿は、第二尚氏王統の開祖尚円の出生地伊是名島にあって王統と関係があり、尖頂を有する岩山にある。陵墓の位置を選定するに当たって、「由来記」に「伊是名ノ海涯、岩カケノ嶺ノ麓ニアリ。戌亥ノ方ニ向、〈攻略〉」(『由来記』巻十六 p.517)〔下線は引用者〕という記述に見られるように、岩カケ＝露出した岩壁の存在を意識していたと思われる。この露出した岩壁・崖面は北西に面している。

ウイバルヤマとの共通点は露出した岩壁・崖面があることである。

② 玉陵について

玉陵は、岩山を利用して築かれている第二尚氏王統の陵墓である。陵墓の背面は、前述の通り南に面した比高数mの露出した岩壁・崖面と思われる。

岩山を掘り込んで東室・中室・西室の3つの墓室を設けたり、岩を加工して円柱状にしたり、墓室のある岩の上に瓦を載せたりと大幅な人為的改変が行われている。

中室背後の右側に高さ1m余りの錐形の自然の岩が見られる。この自然の岩は、この陵墓が創建された当時の土木技術の水準では削平できたと考えられる。中室で遺体の安置が行われることや当該岩の形状が“山形”であることと併せて考えると、この錐形の自然の岩は意図的に残されたと考えられる。

ウイバルヤマとの共通点は露出した岩壁・崖面があることである。

③ 浦添ようどれについて

浦添ようどれは、英祖と第二尚氏王統尚寧の陵墓である。掘り込み墓で、墓室のある比高数mの岩壁・崖面とその上は急斜面をなす高まりになっていて、さらにその上に高さ1.5m・1.3m(上部は人為的に削平)ほどの塔状の裸岩が2つある。これらの裸岩は現在は浦添城跡の城壁に取り込まれている。

御嶽と同様に露出した岩壁・崖面があり、死者の霊魂を天界に導いてくれる神の降臨を願っていたと思われる。また2つの塔状の裸岩を含む高まりを“山”に見立てていた可能性がある。

2つの塔状の裸岩のある場所を“山”と見なすことによって、玉陵の中室背後の右側の自然の岩と同様の役割を担わせていたと思われる。

ウイバルヤマとの共通点は露出した岩壁・崖面があることである。

【陵墓の景観的特徴について】

第二尚氏王統に関係の深い3つの陵墓には、露出した岩壁・崖面があることと尖頂があることである。前者はウイバルヤマでも見られる。後者については、以下の様に考えられる。

「おもろさうし」には、国王と太陽神を結び付けた内容のおもろが複数ある。そして首里グスク内の首里杜ぐすく・真玉杜ぐすくに降臨した神が国家の繁栄をもたらしてくれるとしてい^{※48}る。この神が太陽神を意味していることは、国王を太陽の子として詠んでいるおもろがあるこ^{※49}

とからわかる。

この太陽神崇拜は、国王や王族などの死生観にも影響を及ぼし、死者の霊は陵墓から太陽神の世界(天界)へ向かうと考えたとされる。

死者の霊が天界に向かうには、神の地上への降臨の道筋、いわゆる“降臨の道(神の道)”と呼べる観念上の道を神の降臨した御嶽から逆に昇っていけば到達できることになる。しかしその道は、神のみが通れると考えられていたと思われる。

霊が天界に昇っていくためには、神の道に擬せた陵墓から天界に昇る道筋、いわゆる“天へ昇る道(霊の道)”と呼べる観念上の道が必要となる。池間島には、観念上のティンカイヌーインツ(天に昇る道)があつて死んだ人の霊はこの道を通して天に昇っていくと信じられていた。^{※50}このティンカイヌーインツと同様の観念上の道が、陵墓と天界の間にはあると陵墓の創設者たちは考えていたと思われる。

3つの陵墓にみられる露出した岩壁・崖面上の錐形あるいは塔状の岩のもつ意味を考えるうえで奈良県の三輪山の信仰が参考になると思われる。

奈良県の三輪山は孤立した山である。頂上を目標に神が降臨・鎮座する山であり、近くの集落で死んだ人の霊がいく山で、霊はその山頂から天に昇っていく山でもあるという。このような山頂を目標に神が降臨・鎮座し死んだ人の霊が山頂から天に昇っていく山を神奈備^{かんなび}という。^{※51}

このことから、死んだ人の霊が神の世界である天に昇っていくには天から降臨してきた神の先導が必要と考えられていたと思われる。そのためには神と霊が会う必要があり、神が降臨するときの目標としての山頂と霊が天(神の世界)に昇っていくところである山頂が同一であることが不可欠であると考えられる。

しかし、沖縄本島など琉球文化圏では神の降

臨するところは御嶽であり、墓への神の降臨は想定されていないのが一般的な考え方である。

ところが太陽神崇拜の王族は、孤立した山の代わりに露出した岩壁・崖面があり錐形・塔状の裸岩の見られる場所を選定した。その結果、神の降臨と霊の昇天が同じところで行われることが可能となり、御嶽と陵墓の自然的景観に類似する要素が見られることになったと考えられる。

このような見方は、玉陵の中室の後方の右側に意図的に残されたと考えられる錐形の裸岩の存在すること、浦添ようどれの2つ塔状の裸岩の一つが頂部が削平されて頂上は一つであるとされていることから推測される。

御嶽と陵墓に自然的景観面で、露出した岩壁・崖面があること、錐形あるいは塔状の裸岩が見られることの共通点がある。その背景には、陵墓の創設者が、3つの陵墓に露出した岩壁・崖面上にある錐形あるいは塔状の岩を神奈備に位置づけていたことがあったと考えられる。

(4) ウハルズの神の依り代は何か

ウハルズの神は高原の山(ウイバルヤマ)に降臨し航海安全の神となったと「由来記」にある。このことはウハルズの神は来訪神であることを意味している。

来訪神は、陸上の目標物である依り代に降臨するということから、ウイバルヤマにも神の依り代があることになる。

ウイバルヤマの東境であるバリナーダキは、海拔高度 20mほどの横長の平滑面を有して遠方からも視認できる大きさであり、景観的にも特徴がある。前述のとおりウイバルヤマと同様に神の降臨に係る御嶽・陵墓が沖縄本島等にも安須杜・首里杜ぐすく・玉陵など複数見られる。これらの御嶽・陵墓でもバリナーダキと同じように平滑な岩壁・崖面がある。

また、バリナーダキの平滑面の面している方

角には沖縄本島・那覇港と宮古島・漲水港(平良港)を結ぶ航路が古くから設けられている。この航路は危険な八重干瀬近海^{※52}を通っている。「国絵図」には、この航路沿いにある小岬にまさか崎(池間島北東端)・せとの崎(世渡崎)という地名が見られ、八重干瀬近海における目標物(山当て)^{※53}として認識されていたと思われる。バリナーダキも同様の位置づけだったと推測される。

このような平滑面の向いている方角と航路との関係性は、沖縄本島の安須杜・コバウノ嶽・三庫理でも見られる。さらに九州と朝鮮半島・中国を結ぶ航路上に位置する沖ノ島(福岡県)でも巨大な岩頭(岩壁)があり、古い時代から航海者の航海安全を守る神の鎮座する神の島として信仰されていたという。

以上のこととウハルズの神は航海安全の男神であることから、ウハルズの神はウイバルヤマのバリナーダキを依り代(磐座)^{いわくら}に降臨したと推測される。そして、ウハルズの神の依り代を選択する視線は北からの航海者の視線と同じとみなすことも出来る。

来訪神であるウハルズの神は、石・岩壁を神が鎮座する磐座^{いわくら}とする古代日本のアニミズムの文化的影響下にあった九州などの航海者の宮古地域への来航を示していると思われる。その始まりの時期は12世紀以降と思われる。

池間島の東方海上を通るように沖縄本島と宮古島・漲水港を結ぶ航路が設けられた後に、危険な八重干瀬付近の海域を航行する航海者が航海の安全を願うための神の鎮座する場所、すなわちウハルズを創建したと推測される。

7 まとめ

池間島の聖地ウハルズがウイバルヤマの内部に創建されたのは、池間島の東方海上を通る航路の存在が背景にあったと考えられる。

池間島の北にあって危険な八重干瀬付近を航行する北からの航海者は、神の守護による航海

の安全を強く願ったと思われる。そのために航海者は、この航路沿いにある遠方からも視認できる目標物(山当て)であるバリナーダキ(ウイバルヤマ東境)の北東方向に面する平滑な岩壁(崖面)を神が依り憑く依り代(磐座)にしたと推測される。この神への祈願所がウイバルヤマの内部にあるウハルズである。

謝辞

本稿を作成するにあたり恩師・石井孝行先生と元沖縄県埋蔵文化財センター所長・金城亀信氏には貴重な文献資料を提供していただいた。記して謝意を表したい。

注釈

- ※1 「琉球国由来記」には池間御嶽と表記されているが、記載内容からウハルズ(ウイバルヤマ)のことと考えられる。〔伊波普猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』巻二十 p.579〕
- ※2 『神と自然の環境論』には、神の依り代としての地形や樹木の事例が多く紹介されている。〔野本寛一(2006)『神と自然の環境論』講談社学術文庫〕
- ※3 野口武徳(1972)『沖縄池間島民俗誌』未来社 pp.222~242)
- ※4 「琉球国由来記」の記述内容と『沖縄池間島民俗誌』の文章(219頁)と構造図(220頁)から推測される。また池間島にはウハルズの場所を移動したという記録も伝承もない。
- ※5 集落全体に係る祈願は現在でもウハルズで行われている。
- ※6 ウイバルヤマは、聖域としての観点で見られる場合に使われる言葉で、範囲としてはバリナーダキも含む。一方バリナーダキは、主として地形としての観点から見た場合に使われる言葉である。そして両者は、見る方角によって、前者が西方から、後者が東方から見た場合の呼称でもある。
- ※7 ウハルズはミヤークヅツ(年中行事)のとき

は一般の人でもミャーナカ(祭祀を行うエリア)まで入って参拝できるが、普段は入域禁止である。ウイバルヤマは常に立ち入り禁止である。

※8 烽火の制(1644年)に伴う遠見の設置は、池間島周辺では大神島や狩俣がある。しかし1644年に池間島を含む宮古諸島に烽火の制が実施されたかは定かでない。

※9 伊良波盛男(2011、2018改訂)『わが池間島改訂版』池間郷土学研究所 p. 23。

※10 5,000分の1国土基本図による。

※11 その事例として「浦添ようどれ」「玉陵」などが考えられる。

※12 「琉球国由来記」には次のようにある。

「アフリ嶽 同村〔邊戸村〕

神名、カンナカナノ御イベ

昔、君眞物出現之時、今帰仁間切、アフリノハナニ、冷傘立。時コバウノ嶽ニ冷傘立、又アフリ嶽ニ立ト、申傳也。神道記ニ曰。新神出給フ。キミテズリト申ス。出ベキ前ニ國上之深山ニ、アフリト云物、現セリ。其山ヲ即、アフリ岳ト云。五色鮮潔ニシテ、種々莊嚴ナリ。三ノ岳ニ三本也。大ニシテ、一山ヲ覆盡ス。八九月ノ間也。唯一日ニシテ終ル。村人飛脚シテ、王殿ニ奏ス。其十月ハ、必出給フ也。時ニ託女ノ装束モ、王臣モ同也。鼓ヲ拍、謳ヲウタフ。皆以龍宮様ナリ。王宮ノ庭ヲ會所トス。傘三十餘ヲ立ツ。大ハ高コト七八丈、輪ハ徑十尋餘。小ハ一丈計。〔伊波普猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』卷十四 p. 498~499〕。

※13 国頭村役場編(1967)『国頭村史』国頭村役場 p. 26。

※14 「琉球国由来記」には“宜野久瀬嶽”で祈願のときの唱え言葉が下記のように記されている。

「首里天加那志美御前、百ガハウノ御為、御子、御スデモノ、御為、又島國ノ作物ノ為、唐・大和、島々浦々之、船往還、百ガハウノアルヤニ、

御守メシヨワレ。デ、」

〔伊波普猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』卷十五 p. 499〕。

※15 「環瀛水路誌」には「…埼上樹木繁茂シ其南方附近ハ高八百九十五尺ナリ北方ヨリ來ル船舶ハ皆此埼ヲ標的トスト云フ…」とある〔『環瀛水路誌』p. 799〕。

※16 伊波普猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』名取書店 p. 466。

※17 琉球国絵図史料集編集委員会・沖縄県教育庁文化課編(1992)『琉球国絵図史料集第一集一正保国絵図及び関連史料一』沖縄県教育委員会 pp. 59~62。

※18 「おもろさうし」には、「…又 嘉津宇嶽 取たもの 蒲葵嶽 取たもの」(一連番号 934)とあり、「…嘉津宇嶽を目当てにしたんだもの。蒲葵嶽を目当てにしたんだもの。きっといい航海だよ。」と訳している〔外間守善校注(2000)『おもろさうし(下)』第十三 p. 109〕。

※19 「琉球国由来記」には、祈願のときの唱え言葉が下記のように記されている

「首里天加那志美御前、百御ガハウノ御為、御子御スデモノ、御為、又島國之、作物ノ為、唐・大和・宮古・八重山、島々浦浦ノ、船々往還、百ガハウノアルヤニ、御守メシヨワレ。デ、」

〔伊波普猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』卷十五 p. 466〕。

※20 「琉球国由来記」には、以下の様に記されている。

「コバウノ嶽 同村〔今帰仁村〕

神名、ワカツカサノ御イベ

謝名村ニ、アフリノハナト、云所アリ。昔、君眞物出現之時、此所ニ、黄冷傘立時ハ、コバウノ嶽ニ、赤冷傘立、又コバウノ嶽ニ、黄冷傘立時ハ、此所ニ、赤冷傘立ト、申傳也。〔伊波普猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』卷十五 p. 466〕。※今帰仁間切。下線は引用者。

※21 国土地理院発行:2.5万分の1地形図「那覇」1997。

※22 「おもろさうし」には、「…首里杜 依り降るちへ …真玉杜 憑き降るちへ…」(一連番号109)とあり、「依り降るちへ・憑き降るちへ」は「依り憑き降ろして。神が人や物にかかり憑いて地上に降りてくること。」と注釈されている〔外間守善校注(2000)『おもろさうし(上)』第三 p.100。第三は1623年編集〕。

※23 「琉球国由来記」には、以下の様に記されている。

「キヤウノ内ノ前ノ御ミヤ首里ノ御イベ

此首里森、阿摩美久、作り玉フトナリ。詳ハ中山世鑑ニ見ヘタリ」(巻五 p.145)。

「真玉城ノ御嶽

神名 玉ノミヤノ御イベ

此真玉森、阿摩美久、作り玉フトナリ。詳ニ中山世鑑ニ見ヘタリ。」(巻五 p.145)。(伊波普猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』)。

※24 沖縄県立埋蔵文化財センター調査班編(2011)『沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第56集 首里城跡 一首里城跡発掘調査報告書(Ⅲ)ー平成6年度調査の遺構編』沖縄県立埋蔵文化財センターp.30。

※25 真玉城ノ御嶽の位置については、※24の報告書では洞穴がその場所であろうとしている。降臨する神の依り代が岩壁のある岩の高まりが見られること、「琉球国由来記」に「腓城、尚徳王世子、真玉城に隠れる、腓を取り残す。それで腓城という。」「〔琉球国由来記〕巻五 pp.153～154〕とあることから筆者も洞穴がその場所の可能性が高いと考える。

※26 ※22参照。

※27 「琉球国由来記」には、以下の様に記されている。

「真玉城ノ御嶽

神名、玉ノミヤノ御イベ

此真玉森、阿摩美久、作り玉フトナリ。詳ハ中山世鑑ニ見ヘタリ」(p.145)とある。〔伊波普猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』巻五 p.145〕。

※28 国土地理院発行:2.5万分の1地形図「与那原」1995年。

※29 斎場御嶽では、琉球王国時代には琉球王府の最高位の神女である聞得大君の御新降りの儀式がこの場所で行われていた。

斎場御嶽は、「おもろさうし」には「さやはたけ」、『中山世鑑』には「齋場嶽」、『女官御双紙』には「さやはの御嶽」と出ている。

本稿では王国最高神女の聞得大君のお名付けの儀式が行われた大庫理と、神の降臨に係る伝承がある三庫理(チョウノハナを含む)の2カ所を対象とする。

※30 知念村教育委員会(昭和58)『知念村史資料編1巻 知念の文献資料』知念村役場 p.270。大正時代の写真を見ると、基部の一部に少しくぼんでいるカ所もあるが、全体的には垂直状の岩壁をなし、植生による被覆も見られない〔知念村教育委員会編集・発行(2002)『知念村文化財調査報告書第9号 国指定史跡 斎場御嶽整備事業報告書(工事・資料編)』 p.103〕。

※31 大庫理でのお名付けについて。

夜九ツ時分(12時)頃始まる。聞得大君が嶽内の
大庫理・^{ウフグーイ}寄満・^{ユインチ}三庫理・^{サングーイ}ちようのはな・しきよ
だる雨がの美御水・^{ミウビー}雨だゆるあしかの美御水の
六御前への祈願がある。その間「うちこゑな」
が謡われる。大庫理にきて御名付の儀式が行われて、美御すじの御意を唱えるのは久高の外間ノロがこれを勤める。夜の七ツ時分(午前三時)御待御殿へお帰りになる(「聞得大君御殿并御城御規式之御次第」)(知念村教育委員会(昭和58)『知念村史 資料編1巻 知念の文献資料』知念村役場 p.272～273)。

名付け(なづけ):命名の儀式。久高ノロが行う。

なづける(名付ける):①(生まれた子や、新しい神女に)名前を付ける。命名する。称する。(『沖縄古語大辞典』)。水撫で:三庫理で久高ノロが行う。(『沖縄古語大辞典』p.202)。

※32 「おもろさうし」には、「齋場嶽^{さやはたけ} 御嶽^{みちやけ} ゑよ ゑよ やれ 押せ 又 そこにや嶽^{たけ} 御嶽^{みちやけ} 又 三庫裡^{さんこおり} 在つる 又 三庭あしやげ^{さんみや} 在つる(後略)」(一連番号514)とあり、「三庫裡・三庭あしやげ」は「齋場御嶽にある拝所の名。」と注釈[外間守善校注(2000)『おもろさうし(上)』第十 p.337・338。第十は1623年編集]。三庫裡と三庭あしやげについては、「おもろさうし」には「…又 三庫裡^{さんこおり} させわちへ^{さんみ} 三庭あしやげ^{さんみや} させわちへ…」(一連番号40)とあり、「三庫裡」は「首里城内の聖域」、「させわちへ」は「願って。祈念して。」、「三庭あしやげ」は「三庫裡」の別名。「あしやげ」は神を迎えて祭る場所。」とそれぞれ注釈[上掲書、第一、p.46。第一は1531年編集]。このことから齋場御嶽内の三庫理にも神が降臨すると認識されていたと推測される。また、「琉球国由来記」に次のように記されている。

「サイハノ嶽 久手堅村

<中略>

此齋場嶽、阿摩美久、作玉フト也。詳ニ、中山世鑑ニ見ヘタリ。」[伊波普猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』卷十三 p.350]。

※33 南城市教育委員会(2008)『沖縄県南城市文化財調査報告書 第4集 知念城跡I』南城市教育委員会 p11。

※34 「おもろさうし」には、次のようなおもろがある。

①(一連番号1311)「知念杜^{ちえねんもり}ぐすく あまみきよが 宣立て初めのぐすく 又 大国杜^{ちやくにもり}ぐすく」(知念杜ぐすく、大国杜ぐすくは立派なぐすくである。祖神あまみきよが初めて宣立てをした、由緒あるぐすくだよ)(第十九、pp.296～

297)。

②(一連番号1312)「知念杜^{ちえねんもり}ぐすく 神降^{かみお}れ初^{はち}めのぐすく 又 大国杜^{ちやくにもり}ぐすく 神^{かみ}が降^おれ初^{はち}めのぐすく」(知念杜ぐすく、大国杜ぐすくは立派なぐすくである。祖神が初めて天降りをしてきた、由緒あるぐすくであるよ)(第十九、p.297)。

③(一連番号1310)「知念杜^{ちえねんもり}ぐすく 唐^{たう}の船^{ふね} こゝら寄^よるぐすく 又 大国杜^{ちやくにもり}ぐすく」(知念杜ぐすく、大国杜ぐすくは立派なぐすくである。唐からの貿易船がたくさん寄ってくるよ。立派なぐすくである。)(第十九、p.296)。

④(一連番号1313)「知念杜^{ちえねんもり}ぐすく 見物^{みもんく}国^{くに}ひちゑりに おわもりに みおやせ 又 大国杜^{ちやくにもり}ぐすく」(知念杜ぐすく、大国杜ぐすくは立派なぐすくである。美しい冷傘の国ひちゑりを、あわもり神女に奉れ。)(第十九、p.297)とある[外間守善校注(2000)『おもろさうし(下)』p.296・297]。

※35 「琉球国由来記」には、知念グスクの城内友利之嶽で、毎年十二月、大勢頭部御使之時の祈願のときの唱え言葉として下記のように記されている。

「首里天加那志美御前、何年御スデ始リメシヨワチャル、<中略>、唐・大和・宮古・八重山ノ舩々、上リ下リ、オハツキヤ、ト、百ガホウノアルヤニ、御守メシヨワチヘ、那覇ノ湊ニ、御引付メシヨワチヘ、<後略>」とある。[伊波普猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』卷十三 p.349]。

※36 国土地理院発行:2.5万分の1地形図「那覇」1997年。

※37 浦添市教育員会(2009)『浦添市文化財調査研究報告書 浦添城跡 内郭西地区 西側地域一史跡浦添城跡復元整備事業に伴う発掘調査報告書一』p.16)。ただし、東側の方は頂部が20cm程度削平されている。

- ※38 国土地理院発行:2.5万分の1地形図「那覇」1997年。
- ※39 国土地理院発行:2.5万分の1地形図「伊是名島」。
- ※40 「琉球国由来記」には、伊是名島の番所で祈願のときの唱え言葉が下記のように記されている。
「首里天加那志美御前、十百歳、思子御スデモノ、ノフゴトモ、百ガホウ、唐・大和へ御遣船、並御掛間切ノ船、海上、ノフゴトモ、百ガホウノアルヤニ、御守メシヨワチへ、御タボイメシヨワレ。デハ」とある。〔伊波普猷・東恩納寛淳・横山重(1940)『琉球国由来記』巻十六 p.518〕。
- ※41 琉球国絵図史料集編集委員会・沖縄県教育庁文化課編(1992)『琉球国絵図史料集第一集—正保国絵図及び関連史料—』沖縄県教育委員会 pp.54~55。
- ※42 「おもろさうし」には、「…又 あきり口 鳴響む大君…」(一連番号1531)とあり「あきり口」は「地名。ニライカナイからのあがり口」と注釈〔外間守善校注(2000)『おもろさうし(下)』第二十二 p.432〕
- ※43 野本寛一(2006)『神と自然の景観論』講談社学術文庫。五来重(2007)『石の宗教』講談社学術文庫。吉川宗明(2011)『岩石を信仰していた日本人』遊タイム出版など。
- ※44 五来重(2007)『石の宗教』講談社学術文庫、野本寛一(2006)『神と自然の景観論』講談社学術文庫、吉川宗明(2011)『岩石を信仰していた日本人』遊タイム出版など。
- ※45 野本寛一(2006)『神と自然の景観論』講談社学術文庫 p.117。
- ※46 池間島の“トゥクルヌカンニガイ(場所の神への祈願)”の唱え言葉に「…イキマ ドゥーミ スマヌンミ…(…池間遠見は〔池間〕島の嶺…)」とある〔野口武徳(1972)『沖縄池間島民俗誌』p.249〕。島の嶺とは、池間島における最も

高い嶺の意味もあるが、ここでは最も尊い嶺の意味である。このことはバリナーダキがウハルズを核とする聖域すなわちウイバルヤマに含まれていることを表している。そして、池間遠見は琉球石灰岩堤の尾根上にあり、この堤の東側から見たときの呼び名がバリナーダキである。バリナーダキの北東側の岩壁は平滑な表面になっている。

- ※47 「おもろさうし」には、「一 子丑が時 神が時…」(一連番号596)とあり、「子丑が時」を「夜12時頃から午前2時頃までの時間」と注釈し、「神が時」を「神が出現なさる時」と訳している。〔外間守善校注(2000)『おもろさうし(上)』第十一 p.399〕。
- ※48 「おもろさうし」には神と国王の関係性を詠んだおもろが複数みられる。例えば、「おもろさうし」の一連番号6のおもろには、神が聞得大君に憑いて降臨すると詠まれている。〔外間守善校注(2000)『おもろさうし(上)』第一 p.17〕。
- ※49 「おもろさうし」には、「一 東方の大主 大主が 思い子 てだの形 もちろんへど おわる 又 てだが穴の大主」(一連番号556)と詠んだおもろがあり、「東方の大主、てだが穴の大主は偉大である。大主の思い子国王様は、太陽の絵のように美しくきらめいてぞおわしますことよ。」と訳されている。そして「東方の大主・てだが穴の大主」は「太陽。太陽神」と注釈されている。〔外間守善校注(2000)『おもろさうし(上)』第十一 p.374〕。
- ※50 ティンカイヌーインツ(天に昇る道)
我那覇念(2023)「池間島のツマビジは「端のサンゴ礁」」『宮古島市総合博物館紀要』第28号 宮古島市総合博物館 pp.43~60。
- ※51 鈴木正崇(2016)『山岳信仰 日本文化の根底を探る』中公新書 p.14。瓜生中(2020)『よくわかる山岳信仰』角川ソフィア文庫 p.24、25。
- ※52 我那覇念(2022)「八重干瀬(やびじ)の形状

の琉球国絵図(正保)における表現」『宮古島市総合博物館紀要』第26号 宮古島市総合博物館 pp. 165～182。

※53 『国絵図』 p. 84、85。

※54 宮古島の平良市街地にある住屋遺跡から12世紀頃の九州系の土器類が出土している。

〔宮古島市史編さん委員会編(2012)『宮古島市史 第一巻 通史編 みやこの歴史』宮古島市教育委員会 pp. 47～48〕。

引用・参考文献

東京大学史料編纂所蔵:『正保琉球国八山島絵図』

伊波晋猷・東恩納寛惇・横山重(1940)『琉球国由来記』 琉球史料叢書第一 名取書店

国土地理院(1994)、5,000分の1国土基本図XV I—NH91、XVI—OH42。

野口武徳(1972)『沖縄池間島民俗誌』未来社 p. 220、221～244

野本寛一(2006)『神と自然の景観論』 講談社学術文庫 講談社

琉球国絵図史料集編集委員会・沖縄県教育庁文化課編(1992)『琉球国絵図史料集第一集—正保国絵図及び関連史料—』 沖縄県教育委員会 p. 86、87

宮古島市史編さん委員会編(2012)『宮古島市史 第一巻 通史編 みやこの歴史』 宮古島市教育委員会 p. 47～48

国土地理院発行2.5万分の1地形図「奥」1992年。

国土地理院発行:2.5万の1地形図「伊是名島」1992年。

知念村史編集委員会(1983)『知念村史 資料編1巻 知念の文献資料』 知念村役場 p. 272～273

知念村教育委員会編(2002)『国指定史跡 斎場御嶽 整備事業報告書(工事・資料編)』 知念村役場 p. 8、9

沖縄古語大辞典編集委員会編(1995)『沖縄古語大辞典』角川書店

鈴木正崇(2015)『山岳信仰』中公新書 中央公論

新社 p. 70

伊良波盛男(2018)『わが池間島 改訂版』池間郷土学研究所 p. 7

